へ 13
3838
7

門へ13
3838
7

志ら玉
猫物語
北尾重政画
廿八編上
廿八編下
種員作
國貞畫

白縫譚
柳下製本
廿七編上
廿七編下
歌川国貞画

白紙詩種員作

柳下

廿七編下

東山殿御息女高麗姫
曲亭馬琴

若州多田岳
怪猫室町
御所ゝ於く
殿上を驚ゲす

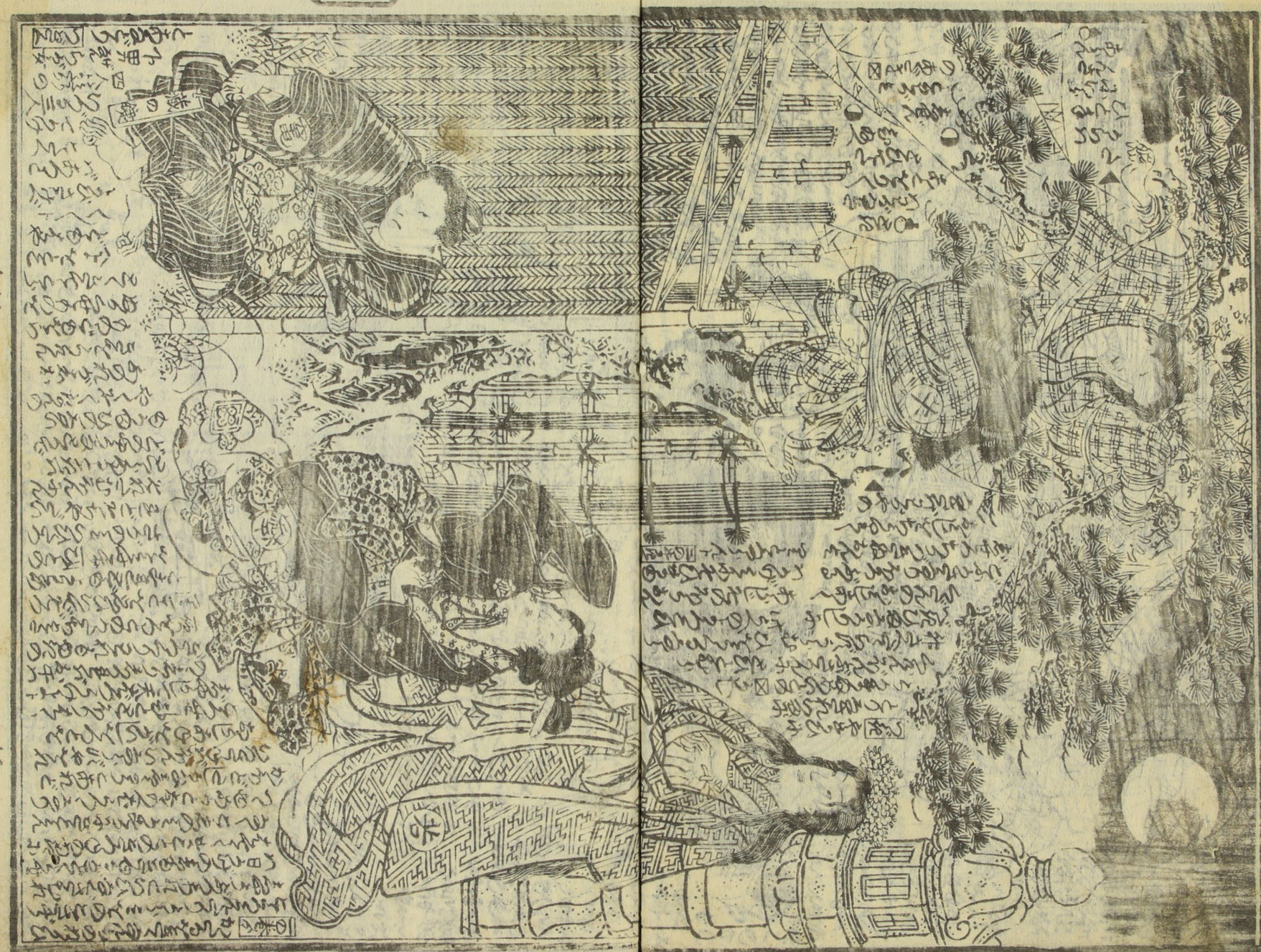
虎を画く猫ハ技の拙なるが如くして猫を描きたるが大事と視え
ても補景の蝶ハ蝶を覚して懼れん猫ハ猫とうんめるこそ宜しく学力ある
稗官の手尔遠波語格假字用例引昔の古言故事来歴誤認なく
訂されるハ尽善美なるべし雖節を撥正宗の短刀指をや切れと最非愛
耳熟ぬ詞遣正史の事實ハ俗ハ疎く琴笛ハ酒酊ハ行院詞曲の物色を
竊傳奇の語調ハ似さ様なるが戯作の本意と拙を守る粤ハ十年廿七編ハ
年明惜まれてこそ人も花文ハ然れ實の元も看客紛々ハ筆耳利いよく
出精仕本編ハ牛を誅鬱の大場ハ綴文ハ卞画の愛敬を於菟の威と
仮く次編の花妬退治首繪ハ掲るもと舊くれど描を画く拙子とも哂
ぬ此年頃誰もくぬひの譚是を学者の真似をせば其徳ゆく有べくや

安政五年戊午夷則卒業
同　六年己未仲春開市

柳下亭種員記

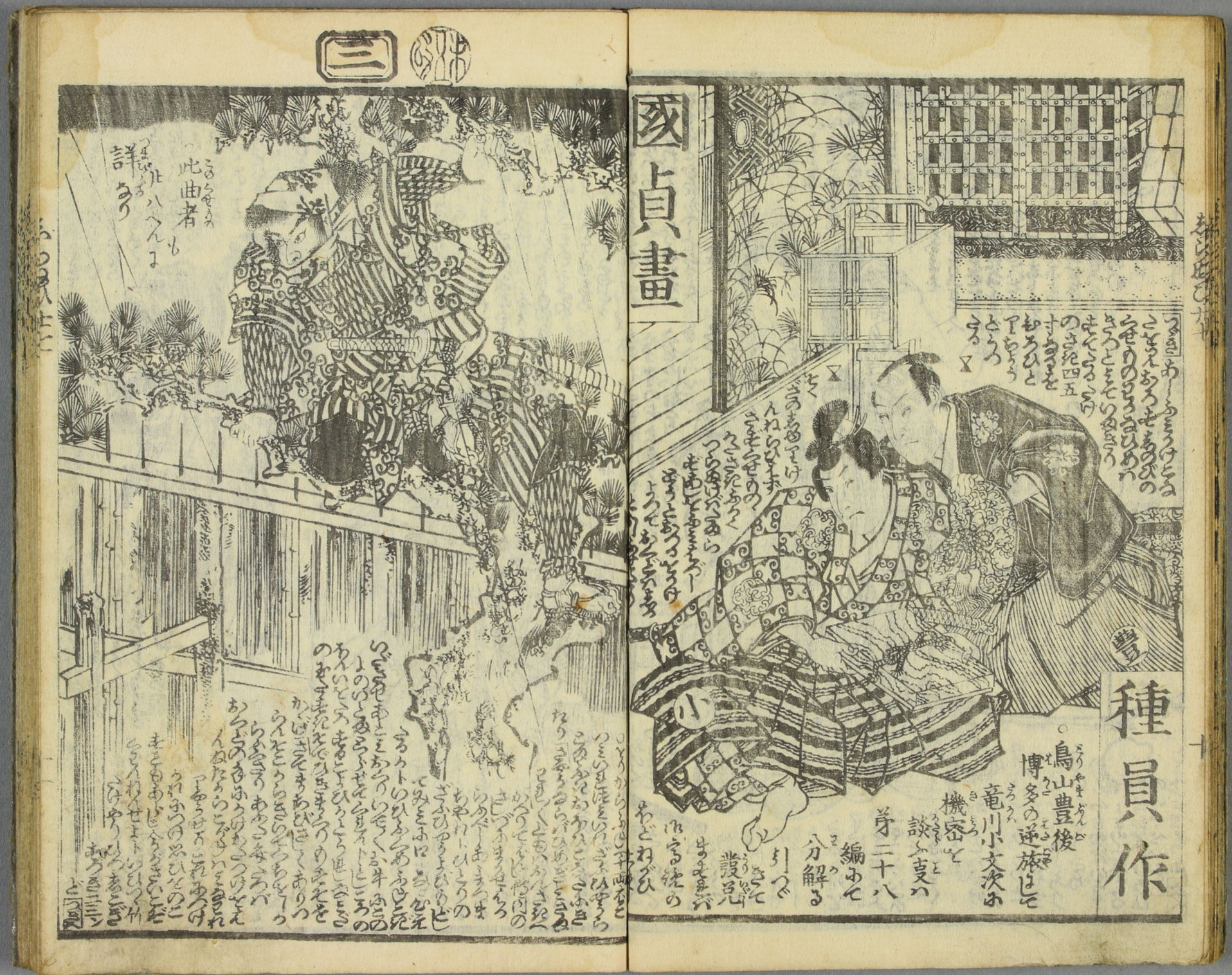
此野辺一編の末の処と
はなはだ興味あり
独鈷屋九郎兵衛が悲境

牛
野馬臺



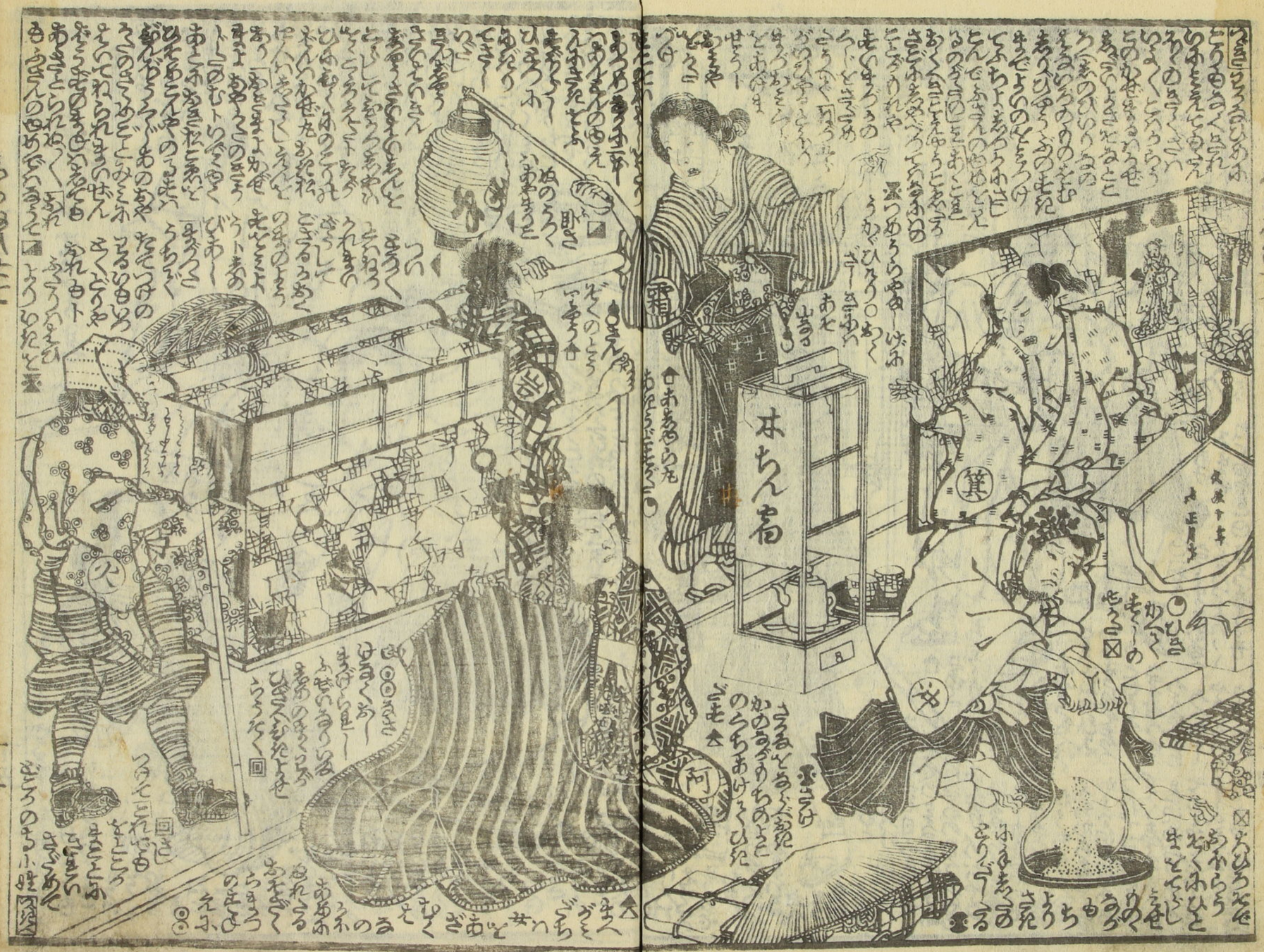
博多宿水陣花菱屋の
横きゆめん竜舞達と記
也廿五編下の終の巻と
引合せ見あべしかつ
ものかうあり

若
紋


國貞畫
種員作
鳥山豊後
博多の逆旅にて
竜川小文次ゐ
機密を
談ふ支ハ
芽二十八
編ゐて
八分解る
引つぐ
さて
讃兒
此曲者も
詳あり

亀
若

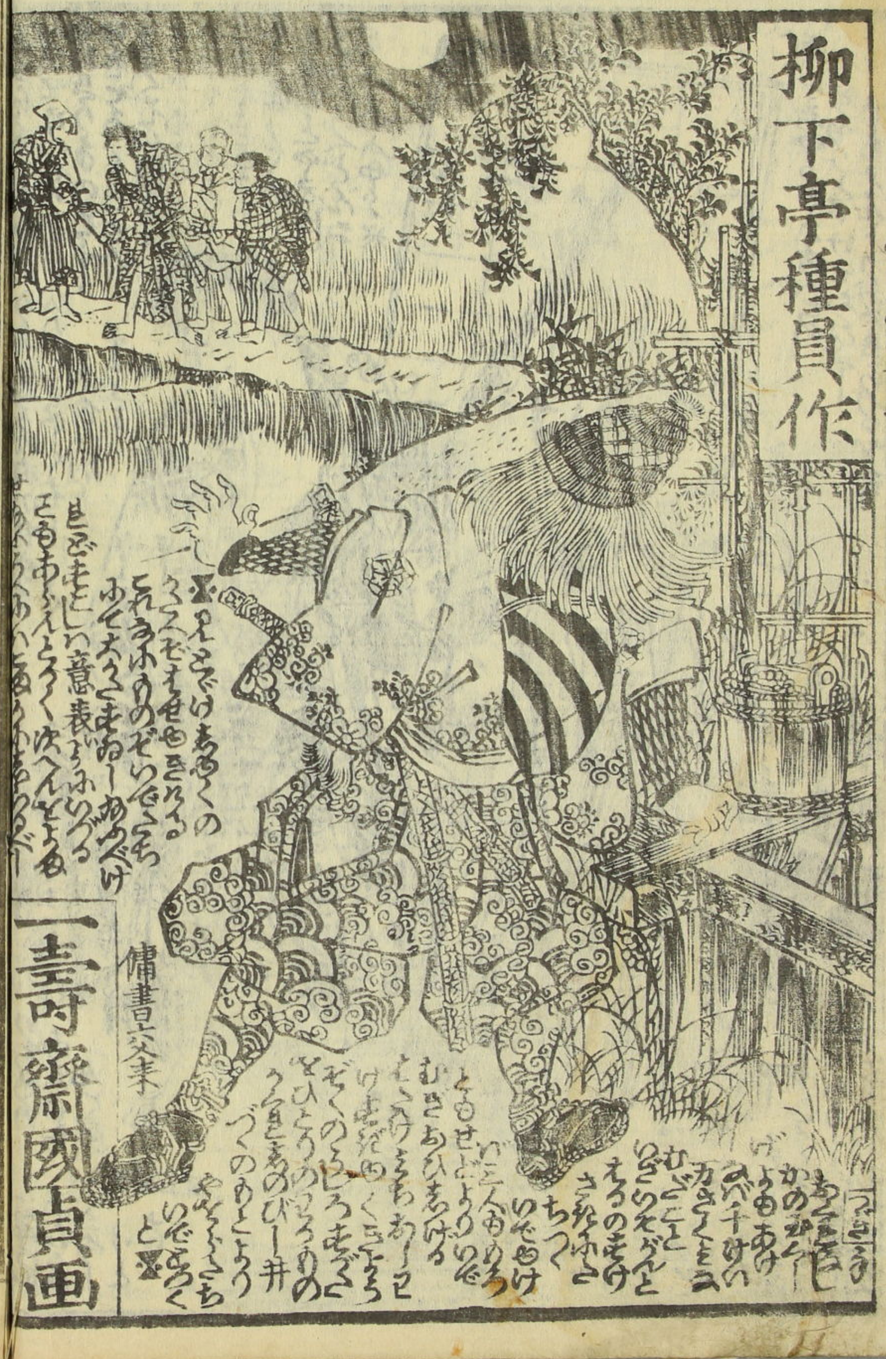
本ちん右
風
根


ほちん者
霜
箕
河
八

阿
沖

沖
春
風
一世の梟雄

柳下亭種員作



一壽斎國貞画

傭書文孝

往昔神武天皇の御宇葛城山の土蜘蛛ハ自已絲りて巣を營る身に有なぐ〳〵葛網まく〳〵搦捕き〳〵とぞ物を損ふ絲を用ゐる人ハ擒りて網を脱ぎず自業自得といたまく而耳吾白縫も筆ハ信飯の巣をいとなむ蜘手の逮ぶ丈四方八面へ眼を配り佳種をあつけ次第ハ引懸おきて時〳〵揮て脚色とあすハ件の蟻子の所業ハ伊〳〵れど運筆ハ凍ず身の輕きにハ似ぬのみ〳〵で廣げ〳〵多端結寄る満尾の地ハ甚難苦く今か〳〵胸の安か〳〵ぬハ羅をるりのぶ自已罠ハかゝに茅〳〵と嘆息するハ蠦蛸の術乃絲を文章どる

安政七年庚申新刊

柳下亭のあるじ

種員ありさと

曲亭馬琴

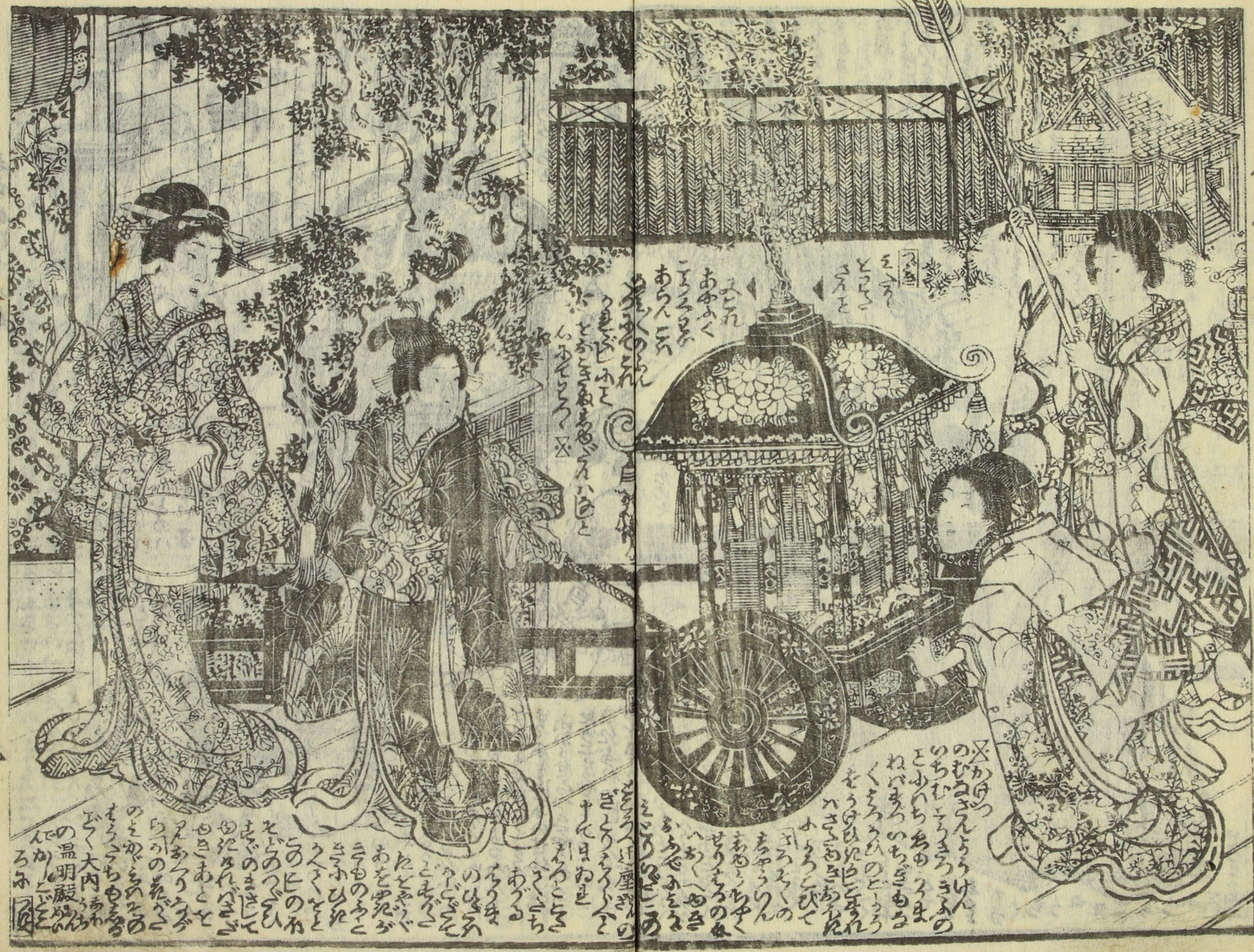
清光
尼

豊

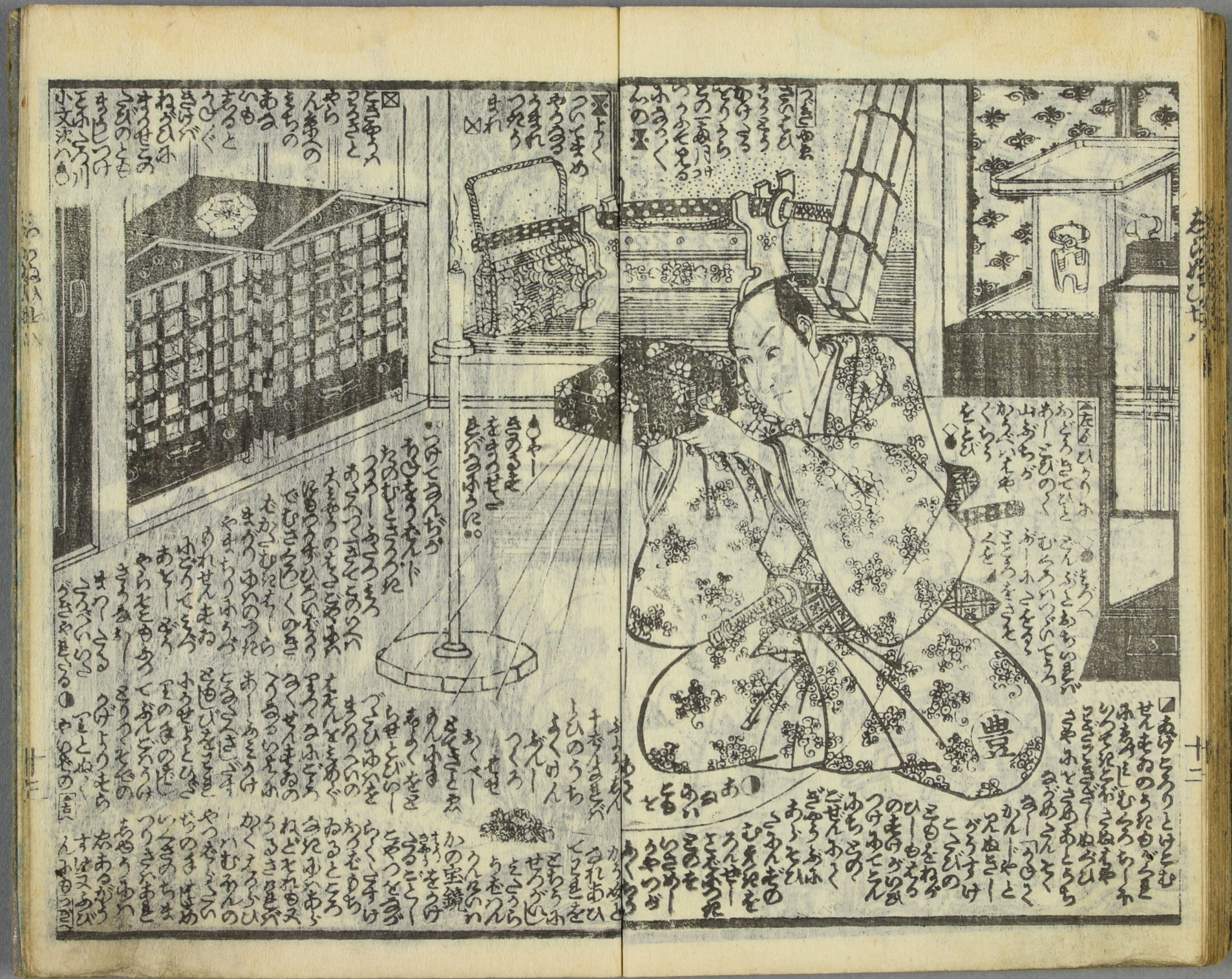
海

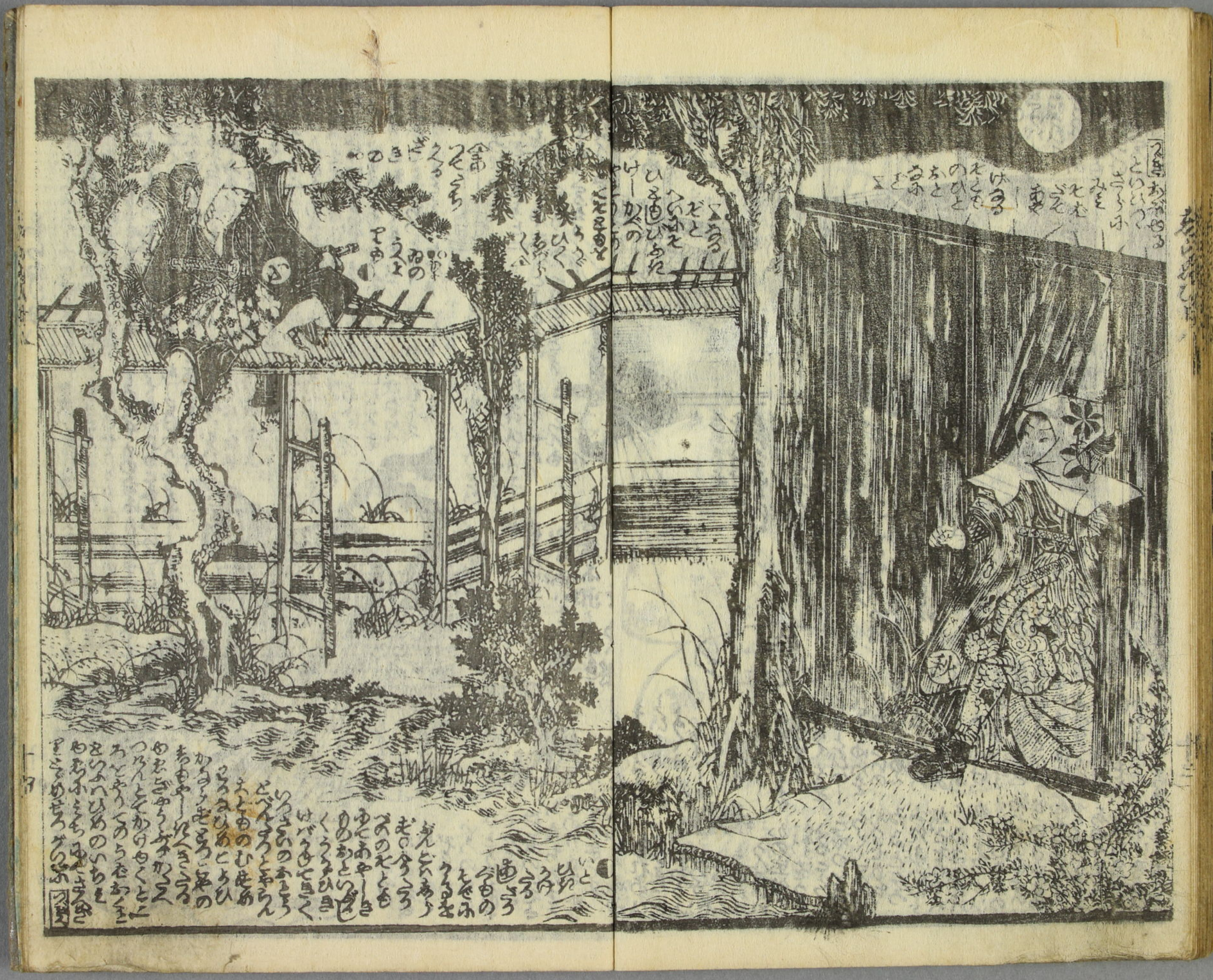
南
柏

春
刑
岩
豆

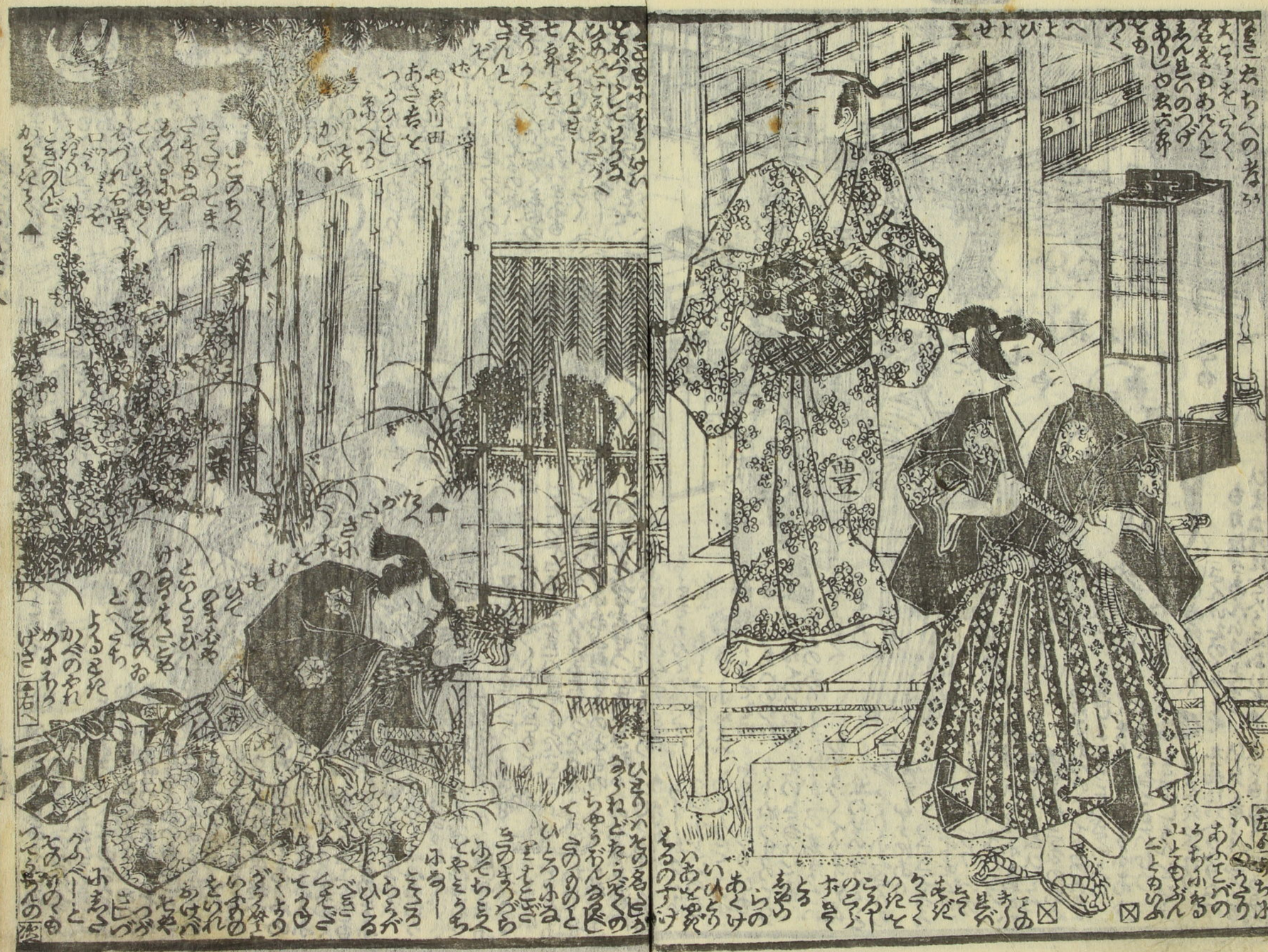


柳下亭種員作
梅蝶樓國貞画
豆





四
博多本陣
花もや表側の
豊後一子秋作の宝鏡
豊
小



若

國貞画 種員作

備書交来

假名讀八犬士傳

自初編
至二十七編

さてしも去年火災ふかるるを御燒亡し我暫く次編を出さざるを世間に忘れられんを恐れ旧稿を彩りて新板を出すべし京板元文溪堂の彫ふこゝろざしかたくなに八編を編とう彫刻いとゝ多し編燈先の分再板し面白く極て賣出し仕り皆是迄の出方ハ何文物編とり求めなの古く極る一年六篇つゝ出板いたし製本美く数形相等義八仕立皆是迄皆同じ

元治紀元甲子立春

第廿四編序自